

1

次の各文の―を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 農業を営む祖父から季節の野菜が届く。
- (2) 絵はかきに写った世界遺産の街並に憧れる。
- (3) 港湾で働く人々の仕事を調べ、授業で発表する。
- (4) 学級の団結に向けた目標を掲げ、運動会に臨む。
- (5) 雄大な風景を生んだ自然の力に、畏怖の念を抱く。

2

次の各文の―を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 体力テストで、ハンドボールをナげる。
- (2) バスのシヤソウカから新緑の山々を眺める。
- (3) 遠方へ帰る友人をエキの改札口で見送る。
- (4) 春の大会がヨクシユウに迫り、一層練習に熱が入る。
- (5) 花壇にウえた朝顔が、ようやく美しい花を咲かせる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \*印の付いている言葉

には、本文のあとに〔注〕がある。)

中学校三年生の唯は母親の梓と共に、佐渡島で努が主催するトキについて  
 体験学習に参加した。東京へ帰る前夜、二人は、努が語るトキの保護につい  
 ての話、努の息子である中学校二年生の虎太と共に聞いていた。

「それでね。弥助はトキ保護センターができたときに、環境庁に頼  
 まれてトキの世話係になったんです。近常さんやほかのスタッフと一緒に  
 に、ミドリやキノの世話をしてね。金太郎さんもキノのことをそらあず  
 うと気にかけてたけん、金太郎さんのためにも卵を産ませんならん、  
 なんとしてもヒナを孵さんならん、ってね。」

キノは捕獲されたオスとペアリングしたが、結局ヒナは孵らなかつた。  
 一斉捕獲された十数羽のトキたちは次々に死んでいき、オスの「ミドリ」  
 も息絶えた。

\*グーの中でただ一羽、滔々と息づく最後のトキ。その運命を知つてか  
 知らずか、キノは長生きをした。弥助よりも、金太郎よりも。

「最後の一羽になるって、どんな感じなんでしょうね。」  
 梓は、心の中に浮かんだままを口にしてみた。努はしばらく黙っていたが、  
 「さあてね。重てえことです。私ら人間にや、どうしたってわからんつ  
 ちやね。それでもいまは、野生復帰させたトキたちが、ちゃんと冬を越  
 せるか。目先のことも、いちばんの気がかりはそれです。」

そんなことを言った。子供たちの行く末を慮る、父親の口調で。  
 しほらしくして、部屋の隅からささやかな声が出た。  
 「トキ、見られますか。」

見ると、唯が亮太と同じように膝を抱えて、努をみつめている。努は微笑んだが、何も答えなかった。すると、もう一度、もつと大きな声で唯が言った。

「明日帰るまでに、トキ、見られるかな。」

「それは……。」と梓が口を挟もうとすると、

「見られるっちゃ。」

そう答えたのは亮太だった。唯は亮太のほうへ顔を向けた。少年は体

育座りの姿勢のままで、「見られるとこまで、連れてっちゃるし。」と、

ぼそと言った。

「……ほんと？」

ためらいがちに唯が返す。亮太は、自信たっぷりの笑顔になって、大き

くうなずいた。

「あーあ、\*ちゃんこと言うて、だっちゃかんじえ。確率低いっちゃよ、

唯ちゃん。」

父に水を差されても、亮太は聞かない。

「ピオトプじゃねえ、トキが餌場にしたらどんど知つとるけん。明日の

朝、連れてっちゃる。」

頬を紅潮させて、唯を誘った。かたくなだった唯の表情が、みるみる明

るくなった。

もう何年も見たことがないような笑顔がこぼれた瞬間、梓の胸の中で、

ことん、と心臓が静かに音を立た。

あわてて畳の上を亮太のほうへ膝で這っていくと、

「おばさんも連れてってくれる？」

そう訊いた。亮太はもうひとつ、大きくうなずいた。

「保証はできんっちゃよ、お母さん。」

苦笑しながら努が釘を刺す。\*フーシヨツプを開くたびに、野生のト

キが見たい、と子供たちに困らされているのだろう。はれ、梓には

トキを見られても見られなくても関係なかった。

見られなくなつたついでに、いま、この島のどこかに、ひっそり点り

続ける命のともしびがある。

そう唯が気づいてくれれば、それでいいんだ。

見渡す限りの刈り入れ後の水田を、朝日がいっばいに照らし出している。

遠く横たわる山々では、赤や黄色の紅葉が色鮮やかに裾を広げている。

壊れそうに冷たく冴えわたる青空に向かって、亮太が顔を上げる。大き

く息を吸いこむと、思いきり叫んだ。

こーい、こーい、こーい、こーい。

声変わりしたばかりの、大人と子供の中間の声。梓と唯は、声が放たれ

た空の彼方をじっとみつめる。

こんなにもまぶしい風景のどこかに、あの美しい鳥たちが息づいてい

る。それは、胸のすく現実だった。絶えかけた命をつないで、生きてい

るのだ。

その奇跡を喜ぶ人間が、ここにいる。

こーい、こーい、こーい。

日本の最後のトキ、キンを呼び寄せたという金太郎を真似て、亮太はト

キを呼んだ。その叫びにこもる少年らしいひたむきさが、梓の胸を打った。

直喩 ~ a shu ji  
 隠喩 Time is money.  
 掛人語 鳥がうたう.  
 比喩

一時間、呼び続けた。最後には唯までが、「い、こいこい、こい」と、亮太と声を含わせて叫んだ。(4)少年と少女の声は、遠慮がちに奏でる楽器のように、最初はてんでにばらばらで、あかて和音を作った。梓は、その青くたおやかな斉唱に、静かに耳を傾けた。

フェリーの出航時間が近づいている。そろそろ、努たちの待つ家へ戻らなければならぬ。

梓が腕時計をちらりと見た瞬間に、亮太がこちらへ向き直って、べこりと頭を下げた。

「ごめんさい。」

叫び続けて声はかすれてしまっていた。梓は微笑した。

「どうして？ なんであやまるの？ こつちがお礼を言わなくちやいけ

ないのに。」

すると、亮太に向かって、唯が突然べこりと頭を下げた。

(5)「ありがとう。」

ふたつの澄んだまなざしが、びったりと重なった。

(原田マハ「斉唱」による)

[注] 金太郎 — キンを捕獲した人物。  
 産ませんならん — 産ませないといけない。  
 ケージ — 檻

ちゃんこと言うて、だつちやかんじえ — そんなことを言うて、だろ。

フーショツプ — 体験や交流などの活動を通して学習する会。

「間1」「……ほんと?」とあるが、このときの唯の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア トキを見られると急に答えたのが努ではなく亮太だったことに驚き、亮太が話しかけてきた理由を理解したいと思っている。

イ トキを見られるかもしれないと期待を抱きながらも、亮太が言っていることが本当なのかどうかを確かめようと思っている。

ウ 亮太がトキを見られると言ったので喜んだものの、努が何も言わなかったため、うそを言われたのではないかと不快に思っている。

エ トキを見られるという言葉を聞いてうれしくなったが、あまりにも自信たっぷりな亮太の様子をかえって疑わしく思っている。

「間2」頰を紅潮させて、唯を誘った。とあるが、この表現から読み取れる亮太の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 努の言葉を聞いた唯がひどく落ち込んでしまったと思いつ、トキを見せると必死に訴えることで、唯の機嫌を直そうとしている様子。

イ 自分の言ったことを唯が信じようとしなかったことに不満を感じながらも、トキを見せると、意地でも約束を交わそうとしている様子。

ウ 本当は自分もトキは見られなれないと思っていたが、今さら違うとも言えず、恥ずかしさを感じながらも唯を説得しようとしている様子。

エ 自分の言葉が努に否定されたものの、トキについて知っていることを懸命に話しながら、何とか唯に見せてやりたいと思っている様子。

理由

問3) 「おばさんも連れてってくれる？」とあるが、梓が亮太にこ

のように訊いたわけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自然の中で生きるトキを見に行くことで、唯が命の尊さに気付くか

もしれないと考え、その姿を母親として見守りたいと思っただから。

イ 唯と亮太がトキを見に行く話を楽しそうにしている様子を見(C)母

親としてもうれしくなり、二人の話題に加わりたいと思っただから。

ウ 唯が明るい表情をしたのを見て、トキを見に行くことがとても面白

そうだと感じ、自分も母親として一緒に楽しもうと思っただから。

エ もしトキを見られなかったら、唯が落ち込んでしまっだろうと心配

になり、その場合には自分が母親として慰めようと思っただから。

問4) 少年と少女の声は、遠慮がちに奏でる楽器のように、最初はて

んではばらばらで、やがて和音を作った。とあるが、この表現に

ついて述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア トキの命に対する感じ方が亮太と唯とでは大きく異なっている様子

を、二人の声を描き分けることによって対照的に表現している。

イ トキを見たいという唯の切実な願いによって亮太の心情が少しずつ

変化していく様子を、時間の経過とともに説明的に表現している。

ウ トキを呼ぶ亮太と唯の心情が一つになるに従って二人の声がしだい

に重なっていく様子を、たとえを用いて印象的に表現している。

エ トキを見たいと思いつながら声を出している亮太と唯のひたむきな様

子を、鋭い感覚で捉えて細部までありのままに表現している。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \*印の付いている言葉

には、本文のあとに「注」がある。)

取り合わせの美とは、代表的なところでは茶の湯における道具の取り

合わせ、会席料理の膳一式、床の間飾り、着物の装いなどの取り合わせ

が挙げられる。そのほか、和風建築の屋内装飾や庭園、いけばなも取り

合わせの美と見なせるが、総じて日本文化のどの場面においても、取り

合わせの美の構成を見出すことができる。<sup>11</sup>すなわち、取り合わせの美は、

日本の形の特徴の一つをなすものである。<sup>12</sup>この観点から日本の形を改め

注

問5) 「ありがとう。」とあるが、あなたが唯だとして、このときの

唯の気持ちを亮太に伝えるとしたら、どのように言うか。あなた

の話し言葉を五十字以内でまとめて書け。なお、や。などもそ

れぞれ字数に数えよ。

捉え直してみること(見) これまで見過ごしてきたことが改めて拾い上げられるのではなからうか(見) (第一段)

(例え字) 現代社会に生きる私たちは、床の間に掛けられる絵や襖絵は

かの障壁画、絵巻物など、平面上に描かれた書画を美術品として見るこ

とにほとんど何の疑問も感じていない。特に古典の作品に触れる多くの

機会は、美術館で開催される展覧会の会場である。私たちは、作品が設

置されていたもとの場所から切り離され、一つの自立した美術品と

して見ることに慣れてしまっている。(これはいうまでもなく西洋の近代

的な鑑賞方法に依っている)であり、それらが「美術品」であるのも、

西洋的な鑑賞方法の枠組みの中においてである。(第二段)

しかし(見) それら「美術品」が制作された当時にまで立ち返って、それが

どのような空間・環境の中で目に触れられていたかを考えると、居住目的

や公的な建物の屋内を装飾する役割を担うものとして、作品が建物の空間

構成の中に組み込まれ鑑賞されていたことが明らかとなる。(見) 水墨画にして

も、軸物として表装されている場合には、床の間飾りのメインの一つとし

て全体の空間的脈絡の中で鑑賞されていたのである。障壁画にしても掛け

軸にしてもその主たる役割は、「客をもてなす」ことであつた。(第三段)

ヨーロッパをはじめとする海外や日本でも、古い時代の美術品・工芸品

は、公共の場に設置されて人々の目を愉しませるとか、国を統治する立場

にある人たちのステータスを表現する、宗教的に崇高なアートを表す、

というようなTPO(時と場所と状況)に条件付けられた中で、人に見ら

れることを目的として制作されたものがほとんどである。そのようなTPO

の文脈から切り離されて、作品が額縁の中や展示台の上で自己完結し、

鑑賞が作品と見る者の一対一の関係の中で成立することが一般化したの

は、せいぜい二百数十年の間のことである。(見) それ以前は、現実の生活空

間・政治空間・宗教空間の中で人目に晒すことを目的として制作されたも

のがほとんどである。そして(見) 日本の場合には、それが特に中世期以降、客を

もてなす文化の深化と共に展開してきたのである。(第四段)

(見) 日本の美術史上に登壇する雪舟、長谷川等伯、俵屋宗達、尾形光琳、

池大雅、伊藤若冲、葛飾北斎、歌川広重、喜多川歌麿など日本の代表

的な絵師の書画群も、美術作品という意識の下で創作されたというより

は、障壁画、掛軸、絵巻物、浮世絵などのメディアが果たしたもてなし

の心遣いの中での制作である。(第五段)

日本の伝統的なアートは、もてなしの文化を土壌として生み出されて

きたと考えられる。(見) おもてなしは日本文化のエッセンスといえる。

そして客をもてなす考えから取り合わせの美も生まれてきた。客を最高

度にもてなすための、あらゆる演出を考えていくことがもてなしであり、

その対象は、案内の出し方から始まり、訪問時の出迎え、衣装、門から母

屋(又は客間)までのアプローチ、さらに屋内の設え、床の間飾り、食

事の献立と膳一式及び喫茶の趣向、その間の所作振る舞いなどあらゆる

ディテールに及ぶ。その一つ一つに、諸道具を取り合わせ、五感を愉し

ませる工夫がなされている。それが取り合わせの美として享受されてい

く。(第六段)

おもてなしは現代のコマシヤルの世界でも流行し、様々なメディア

の中でこの言葉が氾濫している。(見) 日本文化が育んだおもてなし

は、亭主が客をもてなし、客はそれを甘んじて受けて満足感を得るとい

1 座建立していくことを象徴的に表現している(第八段)  
 日本伝統的な工芸品(道具)は、その一つ一つを取り合わせの美の構成要素と見なし得る。その場合、道具の一つがそれ自体で完成している必要は必ずしもない。この意味で、日本の工芸美には、自己完結しない美、あるいは未完成の美ということが評価される傾向にある。(第九段)  
 自己完結しない美、あるいは未完成の美は、桃山期以降の茶道具や会席の器をもって代表されるが、日本の伝統的な絵画、特に俵屋宗達以降の江戸期の絵画にもその特徴が表われている。それは余白や間という特殊な空間表現において顕著である。平面造形の日本の特徴としての余白や間は、自己完結を目指した表現から見れば未完成と見なされる一つの要因である。しかし、私たち日本人には、空間の余韻や興行きを表現する造形語彙として余白や間を受容する伝統がある。さらに鑑賞論の観点

1 座建立していくことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)  
 日本伝統的な工芸品(道具)は、その一つ一つを取り合わせの美の構成要素と見なし得る。その場合、道具の一つがそれ自体で完成している必要は必ずしもない。この意味で、日本の工芸美には、自己完結しない美、あるいは未完成の美、あるいは未完成の美というものが評価される傾向にある。(第九段)  
 自己完結しない美、あるいは未完成の美は、桃山期以降の茶道具や会席の器をもって代表されるが、日本の伝統的な絵画、特に俵屋宗達以降の江戸期の絵画にもその特徴が表われている。それは余白や間という特殊な空間表現において顕著である。平面造形の日本の特徴としての余白や間は、自己完結を目指した表現から見れば未完成と見なされる一つの要因である。しかし、私たち日本人には、空間の余韻や興行きを表現する造形語彙として余白や間を受容する伝統がある。さらに鑑賞論の観点

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

おもてなしを演出した道具を間に置いて亭主と客が談論風発し、やがて亭主と客の境を超えて創造的な時空間を現出していく(茶の湯では「座建立」という)ことが日本文化のエッセンスとしてのおもてなしの在り方である。取り合わせは、複数の個人がもてなしのセレモニーを通して一層建立していくことを象徴的に表現している(第八段)

からすれば、余白や間は見る者の心を絵画空間の中に誘い入れるようなはたらきをするものとして認められる。余白や間を介して、作品と鑑賞者が一つの空間・時間の中に入り込むのである。これもまたある意味でのもてなしではなからうか。そのようなもてなしの意識が余白や間という空間特性を産生させていったと考える。(第十段)  
 (注) アイドル — 偶像。  
 ティアトル — 細部。  
 談論風発 — 話や議論が盛んに行われること。  
 (1) この視点から日本の形を改めて捉え直してみると、これまでに見てきたことが改めて拾い上げられるのではなからうか。とあるが、「これまでに見てきたことが改めて拾い上げられる」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- 1 ア 日本の美術品は、もともと建物の空間の構成要素として鑑賞されてきたこと、現代においても気付くことが可能になるといふこと。
- イ 日本の美術品の特徴は、額縁の中や展示台の上で自己完結する自立性であったと、新たに理解することが可能になるといふこと。
- ウ 日本の美術品はどれも、本来は茶の湯で使うために作られたことを踏まえて、空間の構成を考え直すことが可能になるといふこと。
- エ 日本の美術品は、常に人の目に触れられるような場所で制作されてきたことを、改めて認識し直すことが可能になるといふこと。

【問2】この文章の構成における第六段の役割を説明したものと最も

も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた現代における日本の美術品の取り合わせにつ

いて、そのあらましを順序よく整理して分かりやすく説明している。

イ それまでに述べてきた日本の取り合わせの美における問題点を受け

て、その根拠となる事例を付け加えながら解決の方向を示している。

ウ それまでに述べてきた日本の美術品の役割に対し、客のもてなしの

中から対照的な事例を列挙して二つの違いを明らかにしている。

エ それまでに述べてきた客をもてなす工夫と取り合わせの美との関係

を整理するとともに、具体的な事例を示して論の展開を図っている。

【問3】単にああ、おいしかった。面白かっただけでは済まないのであ

る。とあるが、筆者がどのように述べたのはなぜか。次のうちか

ら最も適切なものを選び。

ア おもてなしの趣向・工夫とは、床の間の飾りや道具の美しさについ

て、客から評価されるように亭主自らが配慮していくべきものだから。

イ おもてなしの演出とは、迎える客のために亭主が案内の出し方から

所作振る舞いまで、あらゆることを考えていくべきものだから。

ウ おもてなしの在り方とは、亭主が一方的に行うものではなく、亭主

の工夫を客が見極めること共に作り上げていくべきものだから。

エ おもてなしに使われる諸道具の構成とは、亭主にもなされる客自

らが満足感を得ることを目的に、完成させていくべきものだから。

【問4】これもまたある意味でもてなしではなからうか。とあるが、

筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 西洋の絵画と比べて自己完結している日本の絵画の余白と間が茶

事のもてなしにおける亭主と客の関係に似たものだと考えたから。

イ 余白や間を介して鑑賞者と作品が結び付いていくことが、亭主が客

をもてなすために演出することに通じるものだと考えたから。

ウ 日本の伝統的な絵画における余白や間が、作品と鑑賞者との一対一

の関係を成立させるために取り入れられたものだと考えたから。

エ 茶の湯の席が、亭主と客が作品の余白や間について語り合うことで

互いに空間や時間を共有できるようになるものだと考えたから。

【問5】国語の授業でこの文章を読んだ後、「取り合わせの美」という

テーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなた

が話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。

なお、書き出しや改行の際の空欄、や、や「などもそれぞれ

字数に数えよ。

筆者の言葉に込められた  
 ① 筆者の言葉  
 ② 具体的な体験  
 ③ 見聞

〇 vs 〇

5

次のA及びBは、それぞれ能「安宅」に関する解説文と対談である。

またCは能「安宅」の台本の一部であり、        内の文章は、現代語訳

である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いて

いる言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

なお、能「安宅」は、敵の目から逃れるために山伏姿に身をやつし

た源義経主従一行が安宅の関所を通る場面が演じられる作品である。

A 能「安宅」には三つの見せ場があります。

一つめの見せ場は、＊シテの弁慶が勧進帳を読むところです。弁慶は東

大寺の大仏再建の勧進のため諸国を旅する「東大寺勧進聖」の山伏と称

するのですが、それならば勧進帳を持つているに違いないと安宅の関

守であるワキの富樫に問い詰められます。しかし弁慶は慌てず「往來の巻

物」を取り出し、それを勧進帳に見立てて見事に読むのです。富樫やその

家来たちに文面を見られては大変と、弁慶は勧進帳を相手に見られないよ

うに読み上げますが、その態度は全く堂々とし、疑う余地を与えません。

弁慶が勧進帳を見事に読み終えたことよって山伏一行は関を通るこ

とを許されるのですが、あらかじめ自立たないように「強力」の格好を

して重い笈を負っていた義経が通ろうとすると、関所の役人・富樫はこれ

こそ義経に違いないと疑います。ここが一つめの見せ場です。山伏たちは

この上はと覚悟をして、刀に手をかけます。しかし弁慶は山伏たちを止め、

義経を散々に打ちます。この弁慶の叱咤の行為によつて義経は無事に通る

ことができるのです。そして無事、関を通ると、弁慶は主君を打った罪は

万死に値すると嘆く訳ですが、義経は弁慶の忠信と機略を賞め、打擲は

八幡大菩薩のしたことで、弁慶に感謝するのです。この主従の深い愛情と

臨機応変の弁慶の知略が観る人を感動させる訳です。

(1) 二つめの見せ場は、富樫が弁慶一行を追いかけ酒を振るまうところです。

富樫はまだ弁慶一行を疑っているのです。弁慶もそれと知つて油断するな

と山伏たちに言い、見事に富樫の酒の振るまいに応えます。そしてこの富

樫の接待に弁慶は礼として「延年の舞」を舞いますが、これは大変雄壮で

あると同時に華麗な男舞で「安宅」の一番の見せどころでもあります。

(梅原猛「梅原猛の授業 能を観る」による)

B

大綱 弁慶一人の「目」で「安宅」全体を見てゆくというのが、僕は能

本来の真意だと思つているんです。<sup>(2)</sup>能の構成自体はそうはなつていない

のですが、ご覧になる方は、潜在的に能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」

を同一線上に見ているように感じます。僕は、富樫は歌舞伎のように義

経を無事通してやろうとは思つていないと思つ。つまり能の富樫は弁慶

が主を思う情を汲み取つているとは、とても思えないんです。

(3)

天野 それは私も賛成なんです。大槻さんはどういふところで、そ

う感じるのですか。

大槻 作品のできた背景を考えます。鎌倉・南北朝に続く室町という

時代は、戦いに明け暮れた時代です。「今日の味方は明日の敵」。で、

人を信じるのが難しい時代だった。親子だつて殺し合ふ、兄弟だつ

て裏切る、そういう時代です。だから安宅の関の関守・富樫は、そ

う簡単に弁慶の言うことを信じないし、ずっと疑つている。

ところが歌舞伎は戦乱も治まった太平の時代に生まれました。それで

「安宅」では描かれなかった、義経・弁慶主従を思う富樫の情が「勧進

帳」では生きる。世の中がそういうもの、情を求めている時代です。



「安宅」から「勸進帳」はつづられますが、同じものように見えて全く違うものだと思はる。もちろん「安宅」も「勸進帳」も二つとも面白いですよ。

天野 そういふふうに思われるようになったのは、いつ頃からですか。

大槻 ほぼ十年ぐらい前からです。

天野 十年ほど前からは、それ以前の演じ方とは、異なる演じ方な

さつているということでしょうか。

大槻 いっぺんに変わったわけじゃないですけどね。詞章を讀み直し

たりしながら……。そうすると、最後に「怪しめらるる面々」と言っ

たり、「虎の尾を踏み、毒蛇の口を」と言いますでしょ。この言葉

は、両者の間の緊張関係を表現していると思はるんです。

(大槻文藏、天野文雄『能』という演劇)による)

C 7 牛 先には聊(4)衛を申して候ふおひだ、酒を持たせてこれまで参りて候

シテ かうおん通り候へ

げにげにこれも心得たり、人の情けの盃に、浮けて心を取らん

とや、これにつきてもなほなほ人に 心なくれそ呉織

\* 地 怪しめらるる面々と、弁慶に諷められて、この山蔭のひと宿

りに、さらりと円居して、所も山路の、菊の酒を飲まうよ

シテ 面白や山水に

地 面白や山水に、盃を浮かめては、流に牽かる曲水の、手ま

づ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ、もとより弁慶は 三塔

の遊僧、舞延年の時の和歌、これなる山水の、落ちて巖に響

くこそ 鳴るは滝の水

シテ 賜(4)べ酔ひて候ふほどに、先達お酌に参らうするにて候

7 牛 さらば賜(4)べ候ふべし、とてものことに先達ひときしおん舞ひ候へ

富樫 さきはどはご無礼をいたしましたので、お詫(4)ひに酒を持たせて

参上しました。

弁慶 さあ、お入りください。

なるほど、そういうことか。人情や酒で機嫌をとろうというの

だな。それにつけても、この関守たちに油断をしてはならぬぞ。

地 決して怪しまれぬようにと弁慶に注意されて、一行は一休

みをしたこの山蔭に円座を組み、「さあ、山路の菊の酒を飲

もう。」と、酒宴となった。

弁慶 ああ、なんとも風情のある山水の景色です。

地 こうして山水に盃を浮かべるように酒宴をなしていると、

それはさながら曲水の宴のようです。曲水の宴では流れてき

た盃をまず手に取って歌を詠(4)むが、ここではまず袖をひるが

えして、舞を舞うことにしよう。もとよりこの弁慶は叡山の

遊僧で、延年のおりには時節にふさわしい和歌を上げて舞を

舞ったものです。いまは山水が落ちて巖に響いているので、

その和歌は、「鳴るは滝の水……」がふさわしい。

弁慶 すっかり酔ってしまいました。わたくしがお酌をいたしましょう。

富樫 それでは、いたどころ。せつかくですから、ご先達ひときし

舞を舞ってください。

(能を讀む ④ 信光と世阿弥以後)による)

〔注〕

シテ——能の主役。

勧進帳——社寺・仏像の建立・修繕などのために金品を募る趣

ワキ——能でシテの相手となる役。

往來の巻物——手紙の模範的な文例を集めた巻物。

強力——荷を負って山伏などに従う者。

打擲——拳や棒などで打ちたたくこと。

「虎の尾を踏み、毒蛇の口を」——能「安宅」の最後にある「虎

の尾を踏み、毒蛇の口を、逃れたる心地して、陸奥の国

へぞ下りける」の部分。虎の尾を踏むような危ない思い

をしつても、毒蛇の牙をやつと逃れたかどほつとして、

東北へ下つていった。

地——地謡。通常八人が舞台石端に二列に座り、本来シテやワ

キが謡うべき詞章を代わつて斉唱する。

叡山の遊僧——比叡山延曆寺の雲遊者な僧。

旨を記した文書。

〔問1〕富樫はまだ弁慶一行を疑っているのです。弁慶もそれと知つて

油断するなど山伏たちに言い、見事に富樫の酒の振るまいに応えま  
す。とあるが、Bの対談で大槻さんが、能「安宅」における「富樫」  
と「弁慶」の関係について述べている箇所がある。その内容を次の  
□内のようにまとめるとき、( ) に当てはまる最も  
適切な言葉を、Bの対談から十三字以内でそのまま抜き出して書け。

能「安宅」は、室町という、戦いに明け暮れ、( )  
に成立したため、富樫と弁慶も、常に相手を疑う心をもつ関係  
となっている。

〔問2〕<sup>(2)</sup>能の構成自体はそうはなっていないのですが、ご覧になる方は

潜在的に能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」を同一線上に見てい  
るように感じます。とあるが、「能の『安宅』と歌舞伎の『勧進帳』  
を同一線上に見ている」とはどういうことか。次のうちから最も  
適切なものを選び。

ア 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」の主役はどちらも弁慶であり、

富樫から疑われ続ける人物として描かれていると理解すること。

イ 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」では、役者による弁慶の演じら

れ方が約十年前から同じように変化してきたと理解すること。

ウ 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」のどちらにおいても、富樫は弁

慶の心中を押し量つて関所を通そうとしていと理解すること。

エ 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」は、作品の成立した時代が富樫

の人物像に大きく影響している点で共通していると理解すること。

【問3】<sup>(3)</sup>天野さんの発言の、この対談における役割を説明したものと  
して最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」の構成について、相手の考えに賛同しつつも別の考えを述べることで、話題の転換を図っている。

イ 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」における役者の演じ方について、相手の意見を受け入れながら補足することで、問題点を整理している。

ウ 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」に共通する弁慶の役割について、相手の意見に共感する部分を示すことで、話題を焦点化させている。

エ 能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」における富樫に対する見方について、相手の考えを詳しく聞き出すことで、対談の内容を深めている。

【問4】<sup>(4)</sup>先には聊爾ちやうじを申して候まうふあひだ、酒を持たせてこれまで参りて候まうとあるが、ここでいう「聊爾」の具体的な内容をAの文章から挙げたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 諸国を旅している「東大寺勧進聖」に対し、自分が守る関所の通行を許したことを。

イ 弁慶に勧進帳を読ませた上に、「強力」の正体を疑い、関所で足留めをしたことを。

ウ 関所を通過した山伏一行に対して酒でもてなそうと、後になって追いかけたことを。

エ 主人への忠義を尽くすため、機転をきかせて主人を激しく打ちたたいたこと。

【問5】<sup>(5)</sup>「きながら」とあるが、これと同じ意味・用法で「きながら」を用いて、二十五字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や。など  
もそれぞれ字数に数えよ。